

新生児科

(スタッフ)

総合周産期母子医療センター所長：飯田 浩一（4月から）
 部長（第一新生児科）：森鼻 英治（4月から）
 部長（第二新生児科）：赤石 睦美
 部長（第一新生児科）：飯田 浩一（3月まで）
 副部長：米本 大貴
 ：慶田 裕美（3月まで）
 主任医師：中嶋 美咲
 医師：橋崎 健太郎（4月から10月まで）
 ：市地 さくら
 ：川上 勲（4月から）
 ：河野 暢之（4月から）
 ：山本 大貴（3月まで）
 嘱託医：川上 勲（3月まで）
 ：橋崎 健太郎（3月まで）
 専攻医：増田 景子（12月から）
 ：塚田 寛子（4月から7月まで）
 ：衛藤 美果（8月から11月まで）
 ：中島 彩（7月まで）

2023年12月現在9名体制で診療を行っています。飯田から中嶋までは周産期（新生児）専門医を取得しています。

森鼻は小児循環器専門医、米本は臨床遺伝専門医を取得しています。

(診療実績)

2023年では総入院数は2022年とほぼ同様でした。表1に出生体重別入院数を前年と対比させて記載します。総合周産期母子医療センター新生児病棟に入院した全ての児（新生児科、小児外科、他科を含む）で、再入院した児は除いています。

出生体重1,000g未満の超低出生体重児は5人増加しました。500g未満の超低出生体重児は1人死亡しました。急性期の治療に難渋し救命できませんでした。他2人の死亡は染色体異常に形態異常を伴っており、どちらも救命困難な児でした。

2023年では新型コロナウイルス感染の母から出生した児が11人入院しました。陽性になった児は一人もいませんでしたが、早産児が4人、2,000g未満の低出生体重児が3人おり、病棟運営には苦労しました。

図に過去10年の経年変化を示します。出生数の減少に伴い、体重が非常に小さい極低出生体重児の入院数は減少しています。一方、入院数は微増の傾向で、人工呼吸器装着患者数は逆に増加する傾向にあります。

す。死亡数は、2023年は3名で、経年的に見ても減少傾向にあります。

表1 入院と転帰（ ）内は死亡数（単位：人）

出生時体重 (g)	2022年	2023年
- 499	1	2(1)
500- 749	6	8
750- 999	3	5
1,000-1,499	15	15(1)
1,500-1,999	33	33(1)
2,000-2,499	104	113
2,500-3,499	230(2)	220
3,500-	35	34
計	427(2)	430(3)

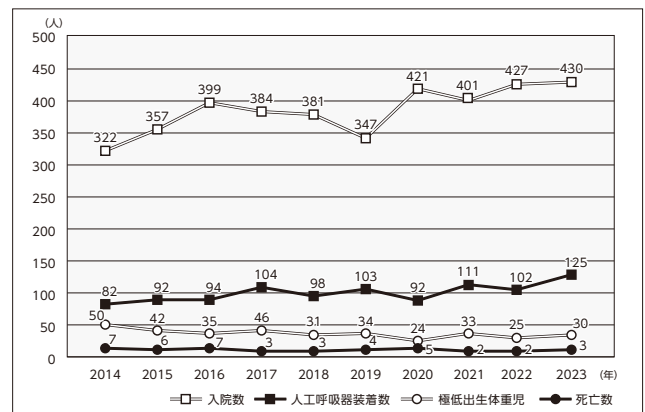


図 過去10年間の各指標の変遷

新生児専用ドクターカー（カンガルー号）出動件数は145件でした。ここ10年で最も多い出動件数です。うち3件は出動依頼が重複して自治体救急車を利用してのドクター搬送となっています。当院に入院依頼があっても満床や他の急患重複で当院に入院できず、カンガルー号が出動して他の周産期センターに搬送した三角搬送件数が13件と多かったです。幸いに県内の周産期センターに搬送ができ、県外まで送ることはありませんでした。

また、転院搬送が18件と増加しました。うち15件は先天性心疾患の手術や代謝性疾患の治療目的に転院しました。県外での心疾患の術後はそのまま退院や小児病棟に戻ってくることが多く、以前よりも迎えに行く件数は減りました（表2）。

表2 カンガルー号出動件数 (単位：件)

	2022年	2023年
搬送入院	100	106
三角搬送	2	13
県病から転院 (ヘリコプター)	9 (1)	18
県病に転院 (ヘリコプター)	0	3
立会いのみ	6	5
合計	117	145

出動した医療圏別の件数では大分市を主とした中部医療圏への出動が大部分を占めます。南部医療圏は周りに受け入れ施設がないため全例迎えに行っています。西部医療圏は西側に福岡県の久留米保健医療圏があり、昨年末カンガルー号の運転手の手配に時間がかかったため、そちらにお願いした事例がありました。時間的にもそちらの方が短時間で迎えに行けるため、今後も西部医療圏に関しては東西両方を利用する形になると考えます(表3)。

表3 医療圏別の出動件数 (単位：件)

医療圏	2022年	2023年
中部	94	118
北部	1	3
東部	1	3
南部	9	5
豊肥	0	0
西部	5	2
県外	7	14

(研修・教育)

新生児蘇生法講習会は新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことを受けて再開しました。2023年より新たに、自宅分娩や車中分娩に対応する救急救命士を対象に、病院前新生児蘇生法のコースを開催し、毎回多数の救急救命士の方に参加して頂いています。今後も継続していく予定です。産科医師、助産師対象の専門コース、学生対象の一次コースも以前と同様に行えました。3年間のブランクを埋められるように今後も開催を続けていきます。

医学生教育も徐々に再開となっています。医学生には新生児の沐浴や哺乳など他ではなかなか体験できない実習を行い好評を得ていましたので、今後も行っていききたいと思います。

研修医には健常な新生児から軽症の病的新生児までを中心に診てもらっています。当院の特徴として健常な新生児をたくさん診ることができる点があり、正常を知ることで異常に気付けるように教育してい

きたいと思います。

(今後の方向性)

全国と同様に大分県の出生数は減り続けています。その中で当院の新生児の入院数は増加傾向にあります。2020年にアルメイダ病院の周産期センターが閉鎖された影響で大きく増えましたがそれ以降も多くの入院を受け入れています。

新型コロナウイルス感染症もまだまだ心配です。5類になっても感染妊婦は発生しています。感染者は原則個室隔離となっています。新生児病棟には個室がなく、隔離する場合は小児病棟の陰圧室に入院させていましたが、スタッフを派遣する必要があり業務上非常に大きな負担になっていました。2023年にテント式の簡易陰圧室を新生児病棟に設置しましたので、現在はその中に保育器を入れて対応しています。

2024年からの心配は医師の働き方改革です。当院周産期センターの新生児部門は新生児科単独で当直体制を維持しており、医師の確保に苦勞しています。全国的に小児科医志望が減っており、さらに都会に集中しやすく、地方の周産期センターはどこも今後の対応に苦慮しています。特に地域周産期センターでは国が示す医師の働き方改革を満たすことは困難であり、周産期センター機能の縮小・閉鎖が危惧されます。大分県では4か所の周産期センターでぎりぎり運営されており、これ以上減ると大分県の周産期医療の崩壊につながりかねません。そうならないように他の周産期センターと協働して大分県全体を支えていきたいと思っています。

当院は小児科専門医養成のための基幹施設となっています。一人でも小児科医が増えるよう若い先生たちにとって魅力ある周産期医療を提供できるように教育面も充実させていきたいと思っています。

今後ともご指導のほどをお願い申し上げます。

【新生児科診察担当医】 2024年4月から

月曜から金曜まで毎日行っています。

月	火	水	木	金
衛藤	飯田	森鼻	赤石	飯田
市地	森鼻	赤石	米本	米本

先天異常、発育発達の問題、育児不安など新生児・乳児期の発育発達全般に関して診療しています。必要があれば小児科、小児外科など他科との共同診療、または行政、福祉、学校などとの連携も行っています。

(文責：飯田浩一)